目視とケツト穀粒判定器で精度向上

米の等級検査に強い味方

大館市の㈲アグリ川田をルポ

ケツト穀粒判定器ＲＮ―700を操作する川田社長

稲刈り真最中の水田（10月上旬）

秋田県の北部に位置する大館市は清らかな山河に囲まれ、その寒暖差の大きな盆地の気候は、農産物の栽培に適している。有限会社アグリ川田＝川田将平社長、秋田県大館市東字宮袋１１１―１＝は、約１８０haの農地で米、大豆、枝豆などを栽培する農業法人だ。また、農産物検査を行う登録検査機関でもあり、ケツト科学の「穀粒判定器ＲＮ―７００」を導入することで、米の等級判定で精度向上につながっている。

川田社長の父親で現在は会長の川田慶氏が、より戦略的な経営を展開するために、２００６年3月に法人化した。現在は正社員10名（うち4名は女性）が働き、約１８０haの農地のうち、米60ha、大豆40ha、枝豆73ha、キャベツ1.4haなどを栽培している。

現在38歳の川田社長は両親との二人三脚で農業に励んできた。２０１３年からは農産物検査を行う登録検査機関となり、川田社長が検査員として等級判定を行っている。また、今年2月にはグローバルＧＡＰの認証を取得することで、より安全で安心な商品を提供できるよう社内ルールの明確化を図るなど、一歩先を行く経営を目指す。

米は業務用米を中心に３２０～３３０ｔを収穫し、玄米で５０００俵以上を出荷している。ケツト科学研究所の「穀粒判定器ＲＮ―７００」は昨年9月に導入した。「農水省には今後の農産物検査に穀粒判別器での測定結果をベースにしたいとする考え方があるので、先行投資しても早く使って慣れた方がいいと思った」「等級の判定でギリギリのところだと迷うことがある。判定器を使うことで、その判断の根拠となるので取引先ともスムーズに話ができる」というのが導入理由だ。「農産物検査規格指定の水分計はケツトさんのものなので、よく知っていた。実際に使ってみると使い勝手もよく、すぐに慣れた」という。川田社長は「目視と判定器のダブルチェックにより検査精度の向上につながる」という考えだ。

自然光で見る目視との違いは、判定器は透過光なので光を透過しにくい粉状部（心白・乳白）や胴割粒を判別するのに高い精度を発揮する。部分着色とカメムシの違いは拾いづらいところもあるがこれは目視で直ぐに分かる。データをパソコンに移し画像データを保存しておけば、現物を取っておく必要がないのも利点だ。また、パソコンでデータ解析すれば測定時間が現行の40秒から15秒に短縮できるスマート化も進んでいる。川田社長は「大豆についても同じ判定器があると有難い」と笑顔で話した。